



中村俊定文庫
文庫 18
127



納 徳 何 本 月 同 仕 面 根 年 五 月

平 平 平 平 平

たむりの... ヤニ... 木

謬ヲ謬リ不謬ヲ不謬トキハ無謬且其
 不謬ニ可有謬謬ニ可有不謬余嘗十
 種點有り未酉三月ニ發シ同臘朔終
 一月二次ニメ十八次也或余知非不懷
 人有リ仰テ歎スヘシ或信スル人有テ
 問非俯シテ警スヘシ此倫ハ君ヲ指シ
 名ヲ彰ス是必阿ノナキ證也尤陳答之





或己蒙昧ニノ理ヲ失口恣ニ早言ヲ
 吐ク者アリ此族ハ若ク密シ名ヲ掩フ
 是必邪志ノ所以也渠ハ論スルニ不足
 忽^チ机右ニ指テ再不采之摠^テ春冬十八
 次ノ間セツノ難問有リ則陳答スル
 モノ五ツ不能陳答余^カ謬リニ落^ルモノ一則
 未^ダ決擇^ス屢^ク以^テ管見^ヲ今此ニ陳スルモノ一
 其五ツノ畧シ其ニツヲ舉ル^ル記^ス片



よのつゝ合くふゆりし

西施が 影のさす

- △ 或同 よのつゝのゲ 西施のゲいり
- △ 西施凍 余カ落見の派のつゝい

いまおしゝまはるゝ

無点
 又さすゝ人 用一市のりま

- △ 用ノ心ま門のまふり
- △ 或同門 門同字ニト
- △ 或同イノカ開ノ門ニあすト

陳名曰門門列之
又開俗字開正字之

開
仁和吳任臣字體辨微曰
○从門从市俗作開从門誤也

又
小補韻會效韻云
○女教切說文(門)不靜也从市門
喧囂也下畧

門
字彙曰
○丁候切說文曰兩士相對共執有後
象鬪之形按此字經史多訛作門
故廣韻注云凡从門者今與門戶
字同字法當从門
字彙頭書曰
○凡从門者今俗作門誤耳

又
字彙辨似之條曰
○門門門門門門
門斗去声鬪鬪鬪鬪鬪等字
从此

又
明黃元立字考曰
○從兩王音鬪門誤又開字下云
開鬪鬪鬪俱从門開誤也

又
仁和志伊續字彙補曰
○姑的切音戟字彙云門右音戟
字从手有所執今或作乳

又
○古曲切音翁字彙門左音翁
字及用鬪物則一也

己
 針
 入
 氣
 體
 元
 正
 五
 五
 五

冬三

▲ 亦く乃をくくくの形

鳥の足の形ハ六出の形也

雪ノ地ニ降テウチノ形ハ六出ナリ六陰教

大陸蓋天地自然ノ教也 以上 性理大全

字と云の形もくく

同 事 抄 抄 抄 抄 抄

各 各 各 各 各

平 佛 抄 抄 抄 抄 抄

紙 長 拍 抄 抄 抄 抄 抄

抄 抄 抄 抄 抄 抄 抄 抄 抄 抄

馬 業 古 人 上 代 の 形 抄 抄 抄 抄 抄

抄 抄 抄 抄 抄 抄 抄 抄 抄 抄

各 各 各 各 各 各 各 各 各 各

後 拾 遺 抄

抄 抄 抄 抄 抄 抄 抄 抄 抄 抄

抄 抄 抄 抄 抄 抄 抄 抄 抄 抄

法 信 抄

抄 抄 抄 抄 抄 抄 抄 抄 抄 抄

2 権しそふおのそふのそふ

しそふのそふにて テニケリカ子 せふのそふに
但しおのそふにておふてふそふ

まふしりゆ しそふのそふにふりふりふり
まふのそふのそふのそふにふりふりふり

本州和名ニ人參ヲカリニケリカト云

同 唐の参よりハ漢参ヲ参ト云テ漢参ト云

昔あつてふりふりふりふりふりふりふりふり

内奥の所ニ云

あつてふりふりふりふりふりふりふり

ゆと接下り脚のゆと

ゆと接下り脚のゆとゆとゆとゆとゆとゆと

ゆと接下り脚のゆと

0 延暦の初日をてて作らるる

人王五十四代桓武治天延暦三年五月山城国上野郡長里ノ地ニ内裏ヲ作

△ ねかとまきこり之殿のしそふ

新式ニ柱小あのそふに柱ニキノ柱ニキノ柱ニキノ柱

五つまき 柱能まき 五つまき

まあのそふにまあにまあにまあにまあにまあに

ねび衣のまきしそふの西

同 ねび衣のまきしそふの西

昔 まあにまあにまあにまあにまあにまあに

とねび衣のまきしそふの西

ねび衣のまきしそふの西

まあにまあにまあにまあにまあにまあに

白紙十の月一とまきしそふの西

大紙十の月一とまきしそふの西

▲心のけりもをきもたう

・長門ハシケリ海に城がた

南方異物志云嶺南溪峒中有龜頭蜜至夜耳ヲ以テ翼ト去テ異物ヲ食テ曉トスル時復還テ如故ノ本州綱目人部

千てしたなき市のと念のも涙

此の句も日とおほくはつていふことなれば
ほろろとけりていふことなればけりていふこと
つとハハをそのまの心まはらばいふこと
そいふことハつたのいふことなればいふこと
かひのさうさう
又宮内守云曰くいふことなればいふことなれば

と鳴声小唯確々いふことなればいふこと

向 前々ははらのけりていふことなればいふこと

ホトトギシシテウツ
善 飽有葉ニ雉鳴亦其北トイハルハ禽ナリ

詩衛風雄雉綏綏トイハルハ 獸ナリ

鳥けりていふことなればいふこと

いふことなればいふことなればいふこと
いふことなればいふことなればいふこと
いふことなればいふことなればいふこと

き 有るにあらばいふことなればいふこと

目く珍たに若く月けりていふことなればいふこと
木のが末とていふことなればいふこと
いふことなればいふことなればいふこと

○ 夢のしるありのりのひらり

他

○ 夢のしるありのりのひらり

○ 遺教經云 劫切德賊 无過瞋恚

○ 花のしるありのりのひらり

○ 花のしるありのりのひらり

○ 花のしるありのりのひらり

○ 花のしるありのりのひらり

○ 花のしるありのりのひらり

○ 花のしるありのりのひらり

○ 花のしるありのりのひらり

○ 花のしるありのりのひらり

天

○ 鶴林玉露 繪、雪者不能繪其清、繪、月者不能繪其明、中畧然則言語文字固不足以尽道

○ 桃柳を看たりりり

○ 古今注 白樂天二妻有り樊素ハヨク歌シ小蛮ハヨク舞ヲ嘗テ有リ詩曰櫻桃樊素口楊柳小蛮腰

○ 往生要集 一、聖衆來迎樂 二、蓮花初開 三、身相神通 四、五妙境界 五、快樂 六、無退 七、引接結縁 八、聖衆俱會 九、見佛圓法 十、隨心供佛 十一、増進佛道

○ 見佛圓法 九、隨心供佛 十一、増進佛道

天

鳥也くろくと女子の習ふをめる

脛餘雜錄 衛夫人名録字茂漪晉汝陰太守
李鉅力妻也晉王逸少筆法師也
又李鉅力大帥ハ光の皇后と号して守ると
ゆたまたまといふ 王逸少ハ義之五筆大師ハ弘法之

火桶之可なり

夜半竹婦ハ冷しく火桶ハまじれば其の
すけい出づらんといふことハ
とていひてたゞすけいといふことハ
なりぬ今ハまじりてすけいといふことハ
みづけ
けあまてハあつて物も清く
そといひてすけいといふことハ
必ずニまじりてすけいといふことハ

心解つての如くといふことハ

樂極忽成醉ノ詞又樂哉醉テ不耻痕ヲ不遺
固孩兒の双袖にすけいといふことハ
眠

千まのりの淑をむくを

清和天皇貞観十一年春移山城國八坂郷神社
三座中間牛頭天王西間少將并東龍王西跡

河海抄 空也上人統清水寺觀音以念佛行

何地為良夢告有故在愛宕山
多与練行後弘念佛于洛陽

えりくちをむくを

上疑乃字をすてハふてりりりつ
すけいハ不ぬ

おろの...
わの...

▲...
...

○...
...

...
...

●...
...

或同...
...

音...
...

...
...

虫...
...

...
...

●...
...

...
...

内証曰夏傷於暑秋為痲痺

...

洞布と...
...

...

...

平深やうとま柳のむらさきの下

ま柳衣のり用ひてふねはかりてうらまに
こくまゝし 吉の下十二月月うらまに
表わし又びりやうくうらまに

○草とあけこふうらまのうらま

艸ハ是陰氣ヲ得ル木ハ是陽氣ヲ得ル故ニ艸ハ柔ニ
木ハ堅ニ走獸ハ是陰氣ヲ得ル鳥ハ是陽氣ヲ
得ル故ニ獸ハ艸ニ伏ラ鳥ハ木ニ棲以上性理大全
鳥のむらさきを眉くく盛りのけいひつ

あけ抄袋とかがりあけハ厚濃故ハ
将座不変ありてうらまのうらま
昨年乃まのたを裏のうらまのうらまに
ふらりえ用一市のうらま

用く心字門ニアラス開く

門 丁候切斗説文兩士相對兵杖在後象鬪
之形

門のふらりえうらまのうらまに

▲行てたうらまのうらま

長 髪と買ふ不價を人買つて

勸行樂

雅陶

老去風光不屬身 黃金莫惜買青春
白頭欲作花園主 醉折花枝是別人

七 生涯はもはみよのひり久す

莊子云兄弟為手足夫婦如衣服衣服破時更
得新手足斷時難再續

或人問 かくく小足ハ善あひは足自に
うらて丁出たうらまのうらまに

▲ 三つもの目とわきとあそび

○ うぐいすのうきとあそび

胎足十月生常理也而七月八月生者
十二三月生者アリ或云気虚 本州細貝部
よひまを 佐藤とわきとあそび

其の字二つあり二句去

○ 雲の雲とあそび

人るるの雲王の秤ゆる信の汁解とつと
まうまうのわきとあそび

馬の馬とあそび

西京記 淨影寺沙門惠遠一鶴ヲ養フ遠
經ヲ講スル毎ニ鶩即入テ伏テ聽若佗事ヲ
説トキハ則翔テ出ツ如是凡事六年已上白眉

水草のゆふとあそび

東坡九相詩第八骨散相

蕭疎蔓州遂纏骨 散彼捨斯水難得

爪髪分離盈野外 頭顱腐敗在岩端

あそびのゆふとあそび

とあそびのゆふとあそび

○ 三つもの目とわきとあそび

随師學乃魚十里蓋世成功春一燈

とあそびのゆふとあそび

ゆふとあそびのゆふとあそび

本合真のハ子とあそび

千母の秋の聲の鳴り

けしき平沙にまじりて
くさくさたる秋の聲の鳴り
あつたやうに
あつたやうに

○ ちかづきの声のあつたやうに

蚤婦のあつたやうに
と書いて
あつたやうに
あつたやうに
あつたやうに

ちかづきの声のあつたやうに

あつたやうに
あつたやうに

● 去年の蝉の鳴り

蝉詩
歳去、歳來、聴不變也
莫言秋後遂為空

▲ 秋の風あり

● 雲の影の月あり

郢展詩
秋水漲來、船去速
夜雲收尽、月行遲

△ 浄悟の心あり

△ 目もたぬまに

まじりに 日ひさしめゆふの夜は

△ 己の力とかりき術ど内毛仙

隋ノ沈先能長羊ニ縁ニ是ヲ内毛仙ト号ス
煬帝ニ從テ遼東城ヲ攻メ時衝拚擊城
半ヲ以テ長サ十五丈沈先其端ニ升テ
戰フ以上隋史

あつては〜〜〜て七点

● 甲子ノ雨ノ始徳ノ方と肥テ

唐俚語云春雨甲子赤地千里夏雨甲子
麥船入市秋雨甲子木頭生草冬雨甲子
牛羊凍死ス

長〜〜〜のふ灯〜〜〜の〜〜〜
何〜〜〜の秋也ゆ原〜〜〜
カ〜〜〜

○ 夢〜〜〜の〜〜〜

文集第十九白

蕭疎涼風與衰翼

誰教計會一時秋

鳥〜〜〜の宿ふ家とわ〜〜〜

たの〜〜〜の命〜〜〜

海〜〜〜の〜〜〜

〜〜〜の〜〜〜

平登る者の〜〜〜

孟蘭西域之語轉此翻倒懸孟是北方
貯食之器 以上翻譯名義

も 同休の〜〜〜

〜〜〜の座の〜〜〜

▲ しくけむうくく 霧のうらみ

△ ハミ膏の世の序の終の西

御

△ 月やりの海よりあーさらば

と久まきんか

毛 じとふゆのうらみと袂の清と

● 人の信と袂の清とたうしと

● 祢子し行をのが持ふ若くして

ななふゆのうらみと袂の清と

● 弾くくびくは上をーあむの若

梅花帯雲も琴上

柳色和煙入酒中

鳥 白くくとし家の暮のたふらぬ

年 日の中乃らぬゆくの鳥と

日ノ中ニ三足ノ鳥アリ日ハ太陽精ニテ鳥ト成ル

是ヲ謂金鳥ト 以上 事文類聚

△ 水晶より清とあつと云乃ほばなり

かきさハうらみのあーとてーマラうらみ

とてうらみ故にうらみ

○ 非ききハ用けり者安ケリ茶

者婆或ハ者域トモ云影堅主ノ子善見ノ庶兄也

母ハ奈女ト云出胎ノ時針筒茶囊ヲ持リ下唇

多 己う声 後のろこ乃響ゆて

多 己う声 後のろこ乃響ゆて

劉賓客ノ玉一奪ヲ得タリ三年ニテ鳴ズ夫人

鏡ヲ懸テ照之己カ影ヲ見テ悲鳴ス

鏡ヲ懸テ照之己カ影ヲ見テ悲鳴ス

鏡ヲ懸テ照之己カ影ヲ見テ悲鳴ス

▲ 肥後のもふまきよせのち

● あり草ノりつ、サロの夜盛

おん人のちよきくちゅうけん
たのしみさきさきしんがし

牡丹とよまきしんがし、又一名サロ草とらる

△ 大さらの内飾、氏と移まつ

中ニ裡とらる

△ あり血ノ流、夏の水のと

何とて

連ニ心算の四かしく、道のちちるき

● 其々の盤の目と一ととの目

事定しつたなまし、まに畧ス

● 足よりとらるる人のいふて

仕学規範 知足者貧賤亦樂 不知足者

富貴亦憂

● ちちら(出り)そのせりさるる住

地藏十五經曰 七人の渡さるるて、今何條と云

はとまきこそとらるる山水の頼ニハハ深の例

ニハ八橋はりも初雨男とまきとらるる女人と

負かして

● 手取のりよとらるる一しん

△ 秋るるもほき一嵐の若衣

云他

冬十七

● 周の代は白粉を忌むと云ふ事

周天下ノ婦人ヲ禁制ニテ粉墨ヲ施スコトヲ得ス皆
黄眉墨妝也

虫 虫のちんちん目と云ふは柳の

世にのちんちん目と云ふは柳の
く柳のちんちん目と云ふは柳の
眼のちんちん目と云ふは柳の

△ 虫のちんちん目と云ふは柳の

まきぎの白と云ふは

△ 虫のちんちん目と云ふは柳の

まきぎの白と云ふは

△ 虫のちんちん目と云ふは柳の

まきぎの白と云ふは

▲ みくらうらものとかく習へ

△ 白あゆと云ふは柳の作の事

例

まきぎの白

まきぎの白と云ふは柳の作の事
まきぎの白と云ふは柳の作の事

○ 上トと云ふは月の名と云ふ

只益虧と云ふは

上のらと云ふは月の名と云ふ
月の名と云ふは

△ 國ハトに一なるは門の事

闕 越逼切音城 門ニ或ヲ加

△ 牛老ぬもハミと云ふは柳の

四十牛のちんちん目と云ふは柳の
く牛老のちんちん目と云ふは柳の

虫
このけしみのちし柳もさし
あふれハ栞の花をまらりり
やのまにたけこのけしやあそ

△ 冬 羽のまこころんふ流して

羽のまこころんふ流して

○ こころのれ年この白とこぞ

年々歳花相似 歳々年人石同 東之國

多一とちりの備と千両のひかり

梅とのかり候とつふ業成二匹のれぬ一色と

羽のまこころん

△ 冬 羽のまこころんふ流して

羽のまこころん

△ 酔 づのころんふ流して

晋史曰 杜預醉テハス人竊ニ視之大叱アリ

酔のまこころん

○ 冬 羽のまこころんふ流して

よのねんふまこころんふ流して

よのねんふまこころん

よのねんふまこころん

よのねんふまこころん

よのねんふまこころん

よのねんふまこころん

よのねんふまこころん

よのねんふまこころん

よのねんふまこころん

よのねんふまこころん

梁ノ寡婦高行ト云者梁ノ貴人是ヲ娶シトス忽チ
割テ曰我不死事ハ知ナキアリ孤ト成シテ悲シクハ也

● 魚 久々西施ノ乳と思フ中リ

東坡先生資善堂ニアリ人ト河豚ノ美ヲ誇レテ其味ニ據テ真ニ是一死ヲ消得 己上 輟耕錄

▲ ぐれいきーうらぶよの理

○ うらののゆがまの形しき

うらののちまきうらぶよのゆがまの形しき
うらぶよのちまきうらぶよのゆがまの形しき

平 藤とてふまにいらん

秦ノ趙高権ヲ專ニセントテ鹿ヲ馬トテ獻ニタル
古事也

むねのちまきうらぶよのゆがまの形しき

長 尺のほろはけの降まじ

尺のほろはけの降まじ
ほろはけの降まじ
ほろはけの降まじ
ほろはけの降まじ
ほろはけの降まじ

平 牛山の杏冷ふに幸う寸

嵩山記曰 嵩山ニ牛ウリ杏樹多言姓山年蝕鏡

アハ丸ヲ須テ命トス

馬 似せぬらぬよのちまき 彼のちまき

似せぬらぬよのちまき 彼のちまき
似せぬらぬよのちまき 彼のちまき
似せぬらぬよのちまき 彼のちまき
似せぬらぬよのちまき 彼のちまき

△ 芥子 凍廣 僕々 困の茶

芥子のちまき

● 白とけろーぬ 卒のれ

白とけろーぬ 卒のれ
白とけろーぬ 卒のれ
白とけろーぬ 卒のれ
白とけろーぬ 卒のれ

○ 朝比奈頼徳院建保元年軍破し對馬三赴ク當年テ

五即時宗富士野三戦ハ後鳥羽院建久四年元祿六ニテ
五百二年

朝比奈頼徳院建保元年軍破し對馬三赴ク當年テ
四百七十二年 俗ニ書事ノ區或ハ時宗ガ子ニシテ朝
比奈老タリ

又 自取 ありのつらなるといふ
自取 と言別々但テぬの判判者の偏
アリトテハ と言別の義ハ

一 正といふと尾になり布本簿

二 夫ヲ為端ニ端ヲ為兩所謂足也

○ 吾人の白つき夏のもの

名はききまへいまきまへあはれとて夏に
とれこれいふとらやまのゆき
れをいふゆきはまねとておもえ
りよ

▲ 朝比奈 此のききまへり

○ 二三日の作 師 走のたろく

二の相伝ニ云

大いふといふ友とてく先難ハハ集りて
後とてゆき六月五日之をてててて

の御河内

△ 朝比奈のききまへり

朝比奈

をききまへりといふは
とらふといふとらふのいふ

● 安樂直錢多ノ五字ヲ周益公燕居ノ室ニ題

セトス對句ヲ求ルニ日ヲ累テ得ズ一ノ字
來テ富貴ハ非吾願ヲ以テ對ス周益公
テ用之

○ 花賣に花をうんとはらうにたり

花のついでにうんとはらうにたり
うんとはらうにたり
おりにまてまてのいしうにうにまてまて
うんとはらうにたり
うんとはらうにたり

● と甲斐しるさつららの温泉の石

けのまてまての温泉の石を井筒にまて
温泉の石をまてまてまてまてまてまて
うんとはらうにたり
うんとはらうにたり
うんとはらうにたり

● 山住の温泉の湯ふ所とトて

山家詩 花間 夏友堂 文語

洞裏 移家鶴下 隣

● たまきをりしころのふらうの世の歩

たまきをりしころのふらうの世の歩
九夏の空をりしころのふらうの世の歩
うんとはらうにたり

● 長同の安まねりし書うろやふ所

畠上詩

東関千里吟 鞍上 晴雲 越人 三五列

安まねりしころのふらうの世の歩
うんとはらうにたり
うんとはらうにたり

● 千きのうろの祇園今もさる日条川

千きのうろの祇園今もさる日条川
神社考 祇園臨時祭六月十五日也 崇徳院

天治元年二始 今もさる日

● ひさご苗牛のいひのいひのいひ
州木子日 龍執牛踐苗トキノ則子苦シ
まのりまのりまのり

陰陽をふかふか

○牛の蹄の跡乃の

馬ノ蹄田ナハ為陽牛ノ蹄ノ折ハ為陰馬ノ
起トキハ自前足牛ノ取ノ起トキハ自後足

● かくあつちの二

蔓竹傳ひつるらんをのすそ樹根地はす
は西のゆきまて粟まのとのく陰
陽り

△ てももひつるふもゆる和田の家

佛言

也 藤作の流ありの信やう

竹のちあふかたそそ及細竹

△ 泣きうらふし同じ

はらり

壬午月小柄落二月 桃咲て

白雲詩集 正月梅花落二月桃花紅 宋枯元有教

不必怨東風

多ふあれな二 沈骨の月ノ空

扇のま名

いさよの形にりり

あつちのまらぬとあれ

牛人中ハ鼻唇のりり

錢唐陳鑑如謂曰唇之上何以謂之人中若只人身

之中半則當在臍腹間蓋鼻也 而上眼耳鼻

皆及鼻鼻鼻也 而下口口口口 皆鼻鼻鼻

陰三畫 陽成泰卦 三三

● たあつちのりり 右貝 左貝

行心りりりり不及細評

○ 乃口之きのさのゆ祓の由名にて

傳教釋云天地間初三輪神現三輪者身口意
三業也心正則三業自正所謂三輪清淨也

▲ 川アミらふ清浄淨潔

者ニ系とニワふけつるはのり

法華經玄義曰 三獸ヲ三乘ニ喩ヘ河ヲ空理ニ喩
謂ク通教ノ声聞緣覺菩薩同ク三界ヲ出テ空理
ヲ取證スルニ根器ニ大小アリ行位ニ浅深アリ象馬
免同ク共ニ河ヲ渡リテ浅深ノ異有カ如ク故ニ
以テ為喩也

平うひくマうて種ふちる小田のり

アミらふけつるはのり

山田ハミらふけつるはのり

くはぬハミらふけつるはのり

△ 秋しき冬の系さのまよひて

十月江南天气好 可憐冬景似春花

まよひけつるはのり

冬あつむくせはつるの曲り形

まよひけつるはのり

まよひけつるはのり

あつむくせはつるの曲り形

○ あつむくせはつるの曲り形

相取の國ハ文徳モ皇天安ス年一始也此城の
後ニ一とらの門扉もなほホウリ

○ 今もとせしころの茶田のけ

くりく許もるはるとせしころのけ
け許あまうさちとせしころのけ

平千よの情とありく越の宮

白牡丹の浮きよるるをくすまふるやけし
初夢としてけしよりのさるる平

△ 長くいづく夜寝起の草まらう

物まかり

夢平不夢是故得失蕉鹿也物我胡蝶也榮枯

黄染也

世何流の沙汰をくすまふるやけし
何のゆゑに所謂鄭人の蕉鹿莊周の胡
蝶唐土の黄染人なるまかりのものと
まらぬのさるるや

△ 夢平不夢是故得失蕉鹿也物我胡蝶也榮枯
黄染也

● まるき同一口の使ふく

らの使ふくはさるるまらぬのさるるやけし
まらぬのは使ふくはさるるまらぬのさるるやけし

▲ 同一まらぬのさるるまらぬのさるるやけし

△ ひろくろふ身ねをいづく力の柱

身柱ハ腎脈第三ノ推下四推ノ上俗ニチリケト云
けしよるるまらぬのさるるまらぬのさるるやけし

日一やまらぬのさるるまらぬのさるるやけし

● 水の乳此の乳芙蓉未芙蓉

芙蓉ノ名ニツアリ一ニハ水中ニ出ル者ヲ草芙蓉ト
名ク荷花是ナリ長恨歌ニ太液之芙蓉ト云フ
是ナリニニ陸ニ生スル者是ヲ木芙蓉ト云フ

巳上 格物叢話

多 莊周に祥又よ祥と莊子はよ

莊子と祥と福見福見
一致なり其れ六同一福見と其れ六ハ
ちよと

虫 初めの角久このほりたも車

初めはひくは句らん

○ 巢の色ハ又初め長崎洛新婦

長崎モ洛新婦モ共蜘蛛也劉禹錫カ傳信左
六蜘蛛其足ノ高キヲ長崎ト名ク壁ヲ行テ
蠅ヲ捕テ蠅虎ト名ク亦斑ナレ者ヲ洛新婦
ト名クト畧

● 糝ゲと云々

俗ニ云耕作ノ時ト節ニヲハカルニ星ノ名
巡環ヲ見ルトサレハ樞童ノ世語ニモ在ル
まんごん

△ 二 一の使いたる行田舎

と亦の句に
一 一の使いたる行田舎

虫 雀の雁の鴨のは巢のうき方と

雀のうき方のうき方の石室のうき方

同 雀のうき方のうき方の

雀のうき方のうき方の

○ 九品の鬼あり九品の浄むる

九品少賦多賦ニ各三種有テ九種ノ餓鬼アリ
又浄土ニ上中下品各三品有テ九品ニ

同 浄土ニ上中下品各三品有テ九品ニ

手袋茅と浄の浄むる

手袋茅と浄の浄むる

